

学位論文内容の要旨

学位申請者	陳 羿秀 【比較社会文化学専攻 平成23年度生】	要 旨
論文題目	山雲子の仮名草子について -西鶴へ至る「情」の文学として-	<p>本論文は、17世紀に活躍した仮名草子作者、山雲子（坂内直頼）の著作について、その文学史的意義を論じたものである。山雲子は従来、『山州名跡志』『書札初心抄』のような啓蒙作の作者として知られていたが、近年になり『好色訓蒙図彙』『好色貝合』『人倫糸屑』といった好色本の作者でもあることが明らかになった。申請者はそれを踏まえ、さらに『列女伝』的の女訓ものと遊女伝とを合体させた趣向で注目されてきた『名女情比』（延宝九年 1681 刊）、また好色指南本である『好色袖鑑』（天和二年 1682 刊）、男色を論ずる『男色十寸鏡』（貞享四年 1687 刊）も署名や文章表現の特色の一致から、山雲子作と推定した。また、遊女評判記に属する一連の作品『都風俗鑑』（延宝八年 1681 刊）・『朱雀遠目鏡』『朱雀諸分鑑』（翌九年刊）も山雲子作であろうと論じた。</p> <p>これらの指摘により、山雲子が好色本・遊女評判記の方面にも多くの著作を有していたことが明らかになった。そして、その内容は単なる遊女買いの手練手管ではなく、男女間の関係が「情」の深さを規準となすべきことを主張するものであることに申請者は注目した（以上第一編）。</p> <p>続いてその「情」はどのようなものであるかについて、『名女情比』について詳細に検討、所収説話の典拠作品との比較から、見返りを求めない一途な愛情が強調されていることを示した。また、一見全く別種の作品と見える、和歌入門書『和歌詞林抄』、前掲『好色袖鑑』が『名女情比』と共通する「情」を宣揚することを明らかにし、山雲子の主張がジャンルを超えたものであることを指摘した。「人情」は近世文学の重要なキーワードであるが、山雲子のこうした「情」への姿勢は、井原西鶴の浮世草子の好色物へ連なるものであり、同時代の作者として相互に影響を与え合う存在であったことを、両者の作品刊行の状況から論じた（以上第二編）。</p> <p>なお、以上の議論の過程で、申請者は山雲子の言説と『伊勢物語』『徒然草』の近世注釈書との関連を指摘しており、これら古典の近世前期における享受論という面も有していることを付言する。</p>
審査委員	(主査) 教授 浅田 徹	
	教授 神田 由築	
	教授 大塚 常樹	
	准教授 松岡 智之	
	明星大学教授 勝又 基	